

# 史料館報

第 38 号

昭和58年 3 月

## 近代行政文書の整理と文書館

水野 保

(東京都公文書館職員)

東京都公文書館に勤務するようになって七年たちました。いまでも、初めて書庫を案内された時の驚きは、忘れておりません。江戸期文書、江戸・東京図、明治から昭和十八年迄の東京府・市文書、都制以降の都公文書、明治以降の行政資料等が整然と配架されている様は、一種壮観で、各書庫に入る度に驚きの連続でした。私は、文書課から転勤してきましたので、文書保存の知識はありましたが、それは現在に対してのものであり、過去の文書が保存され、且利用に供されている事には驚きをおぼえました。一年間のマイクロ撮影業務を経て、二年目に、文書収集から公開利用迄を受け持つ現係に配属され、そこでもう一つの驚きがありました。

それは、過去の文書保存規程の存在を知った事でした。文書課に居りました際には、現在の文書管理の規程に則って仕事をしていたのですから、当然とはいいながら、明治期から現在迄、役所の文書が恣意的ではなく、あくまで一定の規程に基づいて保存されている事は、やはり驚きでした。もともと、これには後日談があつて、戦前、編纂担当の職員が、書店へ流れた廃棄文書を買戻していたり、又、当時の有期限文書がかなり残されている事を知り、それらが現在貴重な史料として利用されていますので、保存担当者(文書館)側の収集判断の重要さをも思い知らされました。それはともかくとして、保存規程の存在を知ってうれしく思ったの

### 目次

- 近代行政文書の整理と文書館 水野 保 (1)  
寛文八年の香貫帳—小谷家文書の整理を終えて— 安澤秀一 (4)  
「徳島藩職制取調書抜」上の刊行 (6)

- 史料館の役割と史料保存体制 (7)  
第八回歴史資料保存利用機関連絡協議会大会に参加して 安藤 正人 (9)  
史料所在調査報告 (10)  
昭和五十七年度新収史料紹介 (11)  
受贈図書・彙報 (13)

大正期 約三八〇〇冊

昭和期 約六六〇〇冊

東京市文書(明治二十二年〜昭和十八年)

明治期

約一二〇〇冊

大正期 約二六〇〇冊

昭和期 約八三〇〇冊

一般的に近代といえは終戦迄をさしますが、東京は戦争中に都制に移行しており、ここでは昭和十八年迄の府・市時代の範囲としました。

これら文書のうち主だったものは学事、社寺、土地、勲業、議会・参事会関係があります。

分類は、それぞれの時代の文書管理の規程に基づいた分類項目別に、簿冊を単位として編纂されており、表紙には年、簿冊名、担当課等が記されており。

目録は、簿冊名を記した冊子目録ができています。公立小学校については、学校名別の索引カードがあり、学制発布以降の出来事が件名でひけるようになっていきます。又、土地関

### 近代行政文書の紹介

当館所蔵の近代行政文書は、約三四五〇〇冊で、所蔵史料全体の十九%にあたります。大別すると次のようになります。

東京府文書(明治元年〜昭和十八年)

明治期 約一二〇〇冊

係については、地番でひく地番目録があります。

配架は、編年順とし、各年の中を分類項目に従って分け、明治期は和綴じのため横置きに、大正・昭和期は洋綴じのため縦置きに並べられています。

昨年度の閲覧人員は、都職員一七〇人、他公共団体六八二人、一般一二七一人でした。因みに、一般閲覧者の史料別利用率は、近代行政文書が六〇・五%（明治期四四・三%、大正・昭和期一六・二%）で、二位の行政資料二〇・〇%を大きく引き離しています。又、近代行政文書中どのような内容のものが利用されたかをみると、明治期では学事、社寺、土地の順となり、大正・昭和期では学事、土地、経済（農工商）となっています。

### 整理上の問題点

私達の仕事は兎にも角にも収集から始まるわけですが、当館の場合、近代行政文書を新たに収集する事はめったにない事です。ここでは、それ以後の分類、目録、配架、利用、修復について述べてみます。

まず分類については、特に問題点はありません。それぞれの時代の文

書管理の規程に基づいて分けられた項目を、そのまま使用しており、元の形をくずしてありません。但し、一部の簿冊に、規程にない簿冊名が記されており、何を根拠としたのか調べてみたいと思っています。

目録については問題があります。

当面は、これが一番大きな問題だと思っています。現在利用できる目録は、公立小学校、土地関係を除いて、簿冊名目録しかありません。一般的には、一簿冊の中に数件から十数件の「原綴」が綴じ込まれています。原綴それぞれの件名については、目録上揃っていません。そのために、閲覧者・職員共々無駄な労力を余儀なくされ、傷みの原因にもなります。

全簿冊の件名目録化が必要ですが、私達も種々の仕事を抱えており、それだけに没頭できないため、優先順位として、利用の多い学事から取り組む事にし、現在、件名、学校名、氏名等の項目取りの作業をすすめています。これにより簿冊上あらわれる全ての件名、学校名、氏名が揃え、件名と学校名は内容による種類わけが可能ですから、もしも将来コンピュータ等の新たな検索制度が導入されるような時代になっても、充分堪え得ると思います。又、同様に、

個人名のアクセスにも答えられます。

配架については特に問題はありません。府と市の文書が混在していますが、目録上区別がつけられています。

利用については、複写に問題があります。複写は長い間、カメラによる場合に認めていましたが、利用者から、電子式複写機（ゼロックス）による複写要求が強くあり、一昨年の秋から有料の複写制度を始めました。近代行政文書は全て、その対象に入っています。文書への傷みを懸念する向きもあり賛否両論のスタートでしたが、利用者は激増しています。傷みについては、次の修復で述べます。

修復については大きな問題があります。まず傷みの理由には概ね二つあげられます。保存期間の長さを利用とです。保存期間の長さによる傷みは、保存環境の良し悪しによるものとされていますが、それだけではない事がわかってきました。当館の近代行政文書を紙質でみると、明治期には和紙、大正・昭和期には、その殆どに洋紙が使われています。修復技術の点では、和紙には確立されたものがあり、質の高い業者さえ選べば、まず問題はありません。と

ころが、洋紙については困った問題があります。昨年十一月二十七日付の朝日新聞に、洋紙の製造過程で添加される硫酸アルミニウムによって、長年の間に紙自体が崩壊してしまう旨の記事が載っていました。私達も文書を扱いながら感じていた事です。大正以降の洋紙の方が、紙自体へたつていゝのです。重ねて、和紙の場合は片面書きが普通ですので裏打可能ですが、洋紙は両面印刷が多く、裏打ちが難しいのです。傷まないうちにマイクロフィルム化するかとまず雁皮のような極々薄い和紙で補修しておく程度しか手がありません。ついでながら、マイクロ化の現状では、明治期でやと二%、大正・昭和期は〇%。今後、化学的な処理をも含めて検討する必要があると。利用に伴う傷みは、閲覧だけの場合には、さほど問題はありませんが、やはり複写が主なようです。現在、私達職員が最大限の注意をはらってコピーしていますが、大量の光と熱が加わる等、簿冊にとっては良くありませんので、枚数制限をさせてもらっています。又、区史や年史等のように、大量に複写する場合には、マイクロ撮影機やカメラを利用してもらい、極力傷みをおさえる

よう努めています。

#### 文書館がなすべきこと

さて、ここまで述べてきて、どうも表題とズレているような気がしてきました。このままでは、「文書館当館」における近代行政文書の整理」で終わってしまいそうです。表題に戻し、近代行政文書の整理上、文書館は何をしなければならぬかを考えねばなりません。

私が当館に勤務して一番困った事は、文書館に関する文献の少なさでした。種々の雑誌・紀要の中に散見される記事をさがし、おぼろげな概念を掴むのにさえ相当の時間がかかりました。それらの中から外国の事情を知り、ふり返って日本の現状をも知らされました。特にジェンキンソンやシェレンバーグ等による、文書館に保存されている文書の定義を知った事は、文書館制度を理解する上で参考になりました。シェレンバーグの「現用価値を失わないながら、尚一定の価値を有し……」という定義に、近代行政文書はあてはまるものだと思えます。但し、現用価値がないという事は、歴史研究者の利用を待つだけではないのです。その文書の作成された目的は終わっていても

本来、法律行為を立証したものですから、公的機関が判断を下す際に必要とする事は多々あります。例えば、寺院明細帳のように明治初年のものであっても、境内地の図面が添付されていますので、登記簿上の誤りを訂正する資料として、法務省へ提出される事がよくあります。もちろん、土地関係簿冊は絶えず公務で利用されています。歴史利用ばかりでなく、行政利用にも充分対抗できる力を残しているのです。つまり行政文書は、作成目的を果たした後でも、行政庁が作成したという事実は消えず、公証性を持ち続けているのです。ですから、文書館の機能の一部には、過去の行政行為を客観視し、行政自身の浄化作用をすすめるチェック機能もあるはずです。単なる社会教育上のサービス機関には留まらないと思えます。行政文書を収集する以上、文書館と行政庁とのこの緊張関係は続くわけで、この緊張感の中で、尚且収集し、公開するという意欲と信念を失わない事が大切なのでしょう。整理にあたっては、行政文書の特性を掴む事が必要となります。文書が作成された組織を知らねばなりませんし、その文書が作成され、保存されてきた制度も知らねばなりません。

ん。行政文書とは、役所の意志決定を、一定の形に則って文書に移し換えたものですから、一定の形式を知る事は必要不可欠です。

文書管理制度（作成・保存・利用・廃棄等）の変遷

#### 組織の変遷

組織（部課掛等）の事務分掌の変遷

これらを把握する、いわば基礎作業こそ、行政文書を扱う文書館にとつて必須の仕事だと思います。これによつて中味を記した件名目録を補完する事ができるのです。よく「出所の原則」といいますが、行政文書の出所は、この作業で掴めるのだと思います。

最後になりましたが、一言述べてまとめたいと思います。

私達文書館員が最も力を入れなければならぬものは、収集と目録づくりだと思います。そして、行政文書の目録に関していえば、件名目録が必要な事はいうまでもありませんが、それだけではまだ不十分です。文書の性格を充分に掴む事が必要で、そのためには、文書管理制度や組織等の変遷を知る事が必要となってきます。この作業には、行政上の知識

や経験も生きてくるはずですが、目録づくりの上にも、文書館員としての幅の広さが求められてくるだろうと思います。こうして、件名目録と変遷を記した目録とを併用する事により、歴史利用、行政利用を問わず、利用者は確実に自己の目的を果たせ、文書は充分に活用されるのだと思います。微力ですが、今後もそのための努力を続けたいと思っています。

# 寛文八年の香奠帳

——小谷家文書の整理を終えて——

安澤 秀一

長い間、夢みてきた「和泉国大鳥郡上神谷豊田村小谷家文書」の整理と目録編成を終えたものの、頁数の超過による予算の関係から半年おくれで、「史料館所蔵史料目録第36集」として冊子体目録の印刷・配付ができたのは、昭和57年9月に入ってからのことであった。

思い返すと、昭和32年3月に「史料館所蔵史料目録第6集武州多摩郡連光寺村富沢家文書」を作ったとほつとした私は、その5月、社会経済史学会大会で、大垣藩領美濃国本巢郡神海村を事例とする「寛文期における年貢諸役村入用の負担体系」(改稿して近世前期における百姓夫役と家中普請役三田学会雑誌62—10・11昭和44年に活字化した)を報告した。その時「徳川初期畿内村落構造の一考察」(社会経済史学23—5・6昭和33年掲載)と題する驚見等曜氏の報告をきき、出色の議論であると共に利用されている史料の素晴らしさに打たれた私は、すぐさま驚見氏に声をかけ、あわせて史料の所蔵関係を

たずねてみた。すると思いがけず、所蔵者は史料を手離す気であるので国の保存機関が引受けるのであれば、という反応がかえってきた。驚喜した私は当時、史料購入を担当していた所三男氏を探し、驚見氏に引合せ、所蔵者小谷憲一氏との交渉をお願いしたのである。そしてその夏には史料を引き取る運びとなり、荷造りに赴くこととなったのは、私にとつて忘れ難い出来事であった。

かつての泉北丘陵の森林は、いまは林立する高層アパート群にとつてかわられて、難波から乗る泉北鉄道豊田駅から歩いて七・八分で行けるようになった小谷家も、25年前には堺市駅から小一時間もかけてバスにゆられ辿りついたものである。木々の緑濃い谷合のひなびた村へ差かかる小高い丘に構えた豪壮な屋敷廻りの白壁は、いまでも見事であり、西門を入って左手の重厚な母屋、右手の大きな米蔵と長屋門も変わらず、数百年の星霜にめげず、どっしりと腰を据えている。広い米蔵の中で、幾

つもの長持をあげ、数千点の史料を確認して荷送りを終えた時、この史料の整理は我が手で、希望に燃えたものである。

ところが史料館に帰りつくと、所氏から、小谷家文書の整理は自分がすると宣告され、以来二十有余年まったくその姿を垣間見ることさえ許されないことと相なつてしまった。そのうえ昭和33年の夏に恩師野村兼太郎先生から、翌年に開学する大阪の桃山学院大学に移るようすすめられた時、まさか丘一つ越えた北野田に大学が建設されようとは、思いもよらなかったことである。

史料館復帰の機会を与えられ、昭和53年3月に大阪に別れをつげるに際し、それまで避けていた上神谷に20年振りに小谷家を訪ねてみた。昭和49年に憲一氏の亡くなられたことを知り、未亡人から故人の待望んでいた史料目録完成を慫慂された時、思わず復帰の第一目標を与えられたこと、覚悟したのである。

漸く長年の約束を果し、広く研究者の利用に供するための公開手段を作りあげたいま、ただ素直にアーキヴィストとしての喜びにひたれることを、嬉しく思うのみである。

さて昭和53年夏からやっと小谷家文書の整理に従事できるようになり、まず32Sの一枚物から手をつけ、31Jの冊子物にとりかかったのは56年6月であった。綴じ目の切れた様々な史料をあれやこれやと合せているうちに、汚れのきつい茶色がかつたいくつかの紙片が気になりだした。書体はかなり古い。そこで断片の山の中から同じようなものを探るうちに、表紙が現れた。「寛文八年申ノ七月九日香奠之帳西眞」と読める。幸

い紙片毎に割印があるので合せてみると、なんと墨付八丁の冊子が完全に復元できた。綴じ目が切れたり、継ぎ目のはがれたものを復元する作業を31J32S約七千点を通じて数え切れないほど試み、一枚物は殆んど復元し得たが、冊子物は思うほどには出来ないものだ。香奠帳の完全復元はまことに貴重な収穫であった。

西眞は幼名十助、成人して治大夫を名乗る。寛永21年家数人数帳(一〇〇一)に26歳とあるから、元和5年生れで、寛文8年7月9日50歳で没したことになる。寛永21年には堺奉行石河土佐守の息女寛永5年生れ17歳を妻としていた。この人は4人の男女を生んだあと、万治3年以前に世を去っている。後添として山城

淀水垂の伴權之丞娘を娶った。寛永17年生れで、寛文8年28歳で夫に死なれるまで5人の男女を生み、正徳2年73歳で没した。

寛文7年宗門改帳(一一五五)に次大夫・女房・男子太郎介・男子四郎・男子六之丞(当歳)の5人がいる。先妻の子のうち2人は早世し、後添の子のうち最初の男子小四郎は既に万代庄伴家に養子となり、三人は早世であった。西眞歿後、太郎介は襲名して治大夫を名乗るが、僅か3年後寛文10年に歿し、第四郎が喜大夫と改名して跡をつぐ。喜大夫も11年後の天和1年に歿し、六之丞が武大夫と改名して跡をつぐというように、兄弟が相ついで跡をとった。

西眞は死去に先立つ寛文8年3月2日に、遺言状「書置申証跡之事」(六四一八)を認めた。宛書は太郎介・四郎の二人で、六之丞はない。跡式の3分2を惣領太郎介、3分1を四郎に分け与え、かつ太郎介が「相應之家を作り、四郎方へ遺し可申」き旨を記している。またこの証文を四郎が保管することとしている。

7月9日香奠帳(四二五)に記帳されている弔問者13人をみると、9日に97人が回向し、あと17日までに31人、そのあと22日に3人、8月に

入って2人である。地域別にみると、上神谷12村59人うち豊田村16人、遠方では江戸・大坂天満各1人、堺6人である。河内村々から6人、上神谷以外の泉州村々から60人で、なかに泉南熊取谷中1人がいる。これは根来Ⅱ中家の関係であろう。

ほかに「念仏仲間」がいる。池田大念仏講中であろう(二八八五)。

香奠は銀三匁・二匁・一匁、銭百文といった貨幣が圧倒的に多く、米・酒・油・素麺・干瓢・牛蒡・線香といった現物も、若干見られる。葬式が終って一段落した8月6日に「治大夫あと二のこし候銀子覚」(三五五二)が作成された。

一銀四百七拾八匁式分  
一金壹分 此銀拾四匁八分  
一四百九拾三匁 はこの内有一百拾九匁八分六厘 山にて木

はへ松は売被申候代銀内  
式百拾七匁三分九厘 請取は、  
残三百式匁四分七厘 取被申候

銀有  
一百四拾五匁木わた売被申候代銀  
一八匁式分しふかき売申候代銀有  
一式拾九匁九分 ひらきゆへ銀あ

つめ候茶屋長三郎分取申候  
一九匁三分 ふるかす売候代銀有

一六拾壹匁 五郎兵衛ちて銀かり  
候あまり有

一七拾七匁三匁式分

高合老賣式百六拾六匁式分六厘  
右之銀子たちあいあらため、は、

さまへ預け置申候

寛文八年申ノ八月六日

外

もち米三斗 売申候代銀有

金箱にあつた現銀の他に、売却代銀として請取る筈の項目に、山林下  
苧・木綿・渋柿・古粕・餅米などの  
あるのが興味をひく。

西眞歿後1年を経て、寛文9年10月6日付で、遺言状履行に関する請合証文を、太郎介Ⅱ治大夫は母とお四郎の二人に宛てて認めた(三五五三)。この請合証文のお四郎は、宗門改帳での四郎のことであろう。

第1項に家の作り渡しを、第2項にお四郎が十五歳の暮になるまで、山林田畠を治大夫が預ること、第3項にお四郎と母の世継料として毎年米10石を渡し、また米2石を産する田2反を作り取りとすること、第4項に十五歳になった時、お四郎分を返還すること、第5項に山林竹木制禁をあげている。

右の請合証文が認められるには、それなりの理由があつた。つまり寛

文9年4月に太郎介Ⅱ治大夫は大鳥郡物種治左衛門娘を妻に迎えている。恐らく襲名したものの未婚であつたため婚姻を急いだのであろう。

「寛文九年四月吉日祝儀引手物覚帳」(六四一九)という墨付四丁の帳面が残されている。祝儀を持参した55人の名前と物品が記されている。品名をあげると、木綿26・帯6・真麻2・さや1・うね足袋1・羽二重2・郡内嶋1・わり嶋1・綿帽子1・さらし1・小袖1・杉原1・中折1・銀子3・小松1である。人数以上に多いのは、1人で2種類持参が2人いるからである。

小谷家は慶長年間すでに木綿を栽培していた(二二二〇)。さきにあげた「残し銀覚」にも木綿売代銀があつた。祝儀引出物の半分は木綿反物であつた。此の地方での木綿栽培の普及を物語る史料だといえる。

ともあれ太郎介Ⅱ治大夫の早世によつて家産の分割は中止され、小谷家における包括承継への緒となつたことの含意は、及ぶ所が大きい。

悲しみと喜びとがあざなえる縄の如く織りなされて、人の世が過ぎてゆくさまを、小谷家文書のうちから拾つてみた。

## 徳島藩職制取調書抜

## の刊行

「史料館叢書」既刊4冊に続けて、昭和57・58両年度において、「徳島藩職制取調書抜」上・下二冊を刊行することとなった。

史料館所蔵史料のうちに「阿波蜂須賀家文書」があることはつとに知られており（史料館所蔵史料目録第4集昭和30年刊）、その利用頻度はたいへん高い。約三千冊四千通という分量は、大名の藩庁史料としてそう多い方ではないが、藩政史研究にとって利用価値は甚だ高い。近世前期の日付をもつ史料が相対的に多いが、近世後期の史料にも有用のものが少なくない。その一つとして既に藩法研究会（代表石井良助博士）編「藩法集3 徳島藩」（大竹秀男教授担当）に、「元居書抜」十六冊が翻刻収録されているのは周知の所である。

「元居書抜」は十二代斉昌（文化10年襲封、天保14年隠居、安政6年没）の時期、天保年間に編纂された藩撰法令集成である。徳島藩においては十代重喜の宝暦・明和改革とその挫折、十一代治昭による重喜政策志向の復権を目指した寛政改革が行

われ、十二代斉昌は先行二代の改革成果をうけついたのである。

徳島藩は天正13年先代家政の阿波国拝知に始まり、元和元年淡路国を与えられ、以来阿波淡路国領知表高二万七千石蜂須賀氏の統治が明治2年まで続いた。地方知行制を続け、また実高四〇万石を越える大藩であり、その上領内に藍玉と塩という二つの特産品を産して、経済活動の活潑な雄藩であった。

本書では「元居書抜」を補完し、かつ後期藩政改革を明らかにするような史料をいくつか撰んでみた。つぎに収録史料の表書をあげる。

御作法御成来り替并御家中とも以前二相違候品草案上・下 二冊合  
二二二丁、（宝暦年間作成）  
諸御役人被仰付来格式之帳 一冊  
二九丁、（宝暦年間作成）  
江戸諸御役人被仰付来格式之帳  
一冊一八丁、（宝暦年間作成）  
須本惣御役人格式勤来之覚 一冊  
一一丁、（宝暦七年）丑二月  
安永以来諸御役場新二被仰付候分調帳

安永以来諸御役場御指止・兼帯等被仰付候分調帳  
安永以来諸御役名替文字認替之分調帳

右三点合一冊一九丁、（天保年間作成）

安永以来諸御役場新二被仰付候分書抜帳 一冊一五三丁、（天保年間作成）

安永以来諸御役場御指止・兼帯等被仰付候分書抜 一冊一八九丁、（天保年間作成）

（以上上巻所収昭和58年3月刊行）  
（以下下巻所収昭和59年3月予定）

御郡代被仰付候書抜 一冊一五六丁、（天保年間作成）

御郡代被仰付候以来棟付 一冊一七〇丁、（天保年間作成）

御壁書御裏書古今之御引合取調帳 一冊二七丁、（享和年間作成）

制札之御間江御指出七ヶ条之御条目 一冊五丁、（享和年間作成）

吟味目附（銀札場）心得之義、目附共ら窺出并相尋候往返一巻控 一冊二二丁、享和二年九月

御奏者役控 一冊五七丁、寛政五年一月二五日

御家中知行高并役高帳 一冊六三丁、文政一一年

洲本御家中知行高并役高帳 一冊

一〇丁、文政一一年  
徳島無足人以下分限帳 一冊二〇三丁、文政一一年

須本・京・大坂無足以下并御合力共分限帳 一冊二八丁、文政一一年

お里殿分限帳 一冊三丁、文政一一年

江戸住無足諸士以下分限帳 一冊四五丁、文政一一年

右にあげた二一種二〇冊の表書は雑多に見えるであろうが、主題は徳島藩職制であり、藩庁の公用記録が殆んどである。右の中にも「書抜」という語があるように、先例をたずねて記録することを、徳島藩では書抜という。本書を「徳島藩職制取調書抜」と題したゆえんである。

なお「史料館叢書」6として、「豆州内浦漁民史料」を予定していたが、担当者榎本宗次氏の急逝のため計画を変更し、にわかに本書を上・下に分ち、5・6として二年度にわたることとした。諒とされんことを願うものである。（安澤秀一）

東京大学出版会三月末発行

A5判 本文三三三頁

上製本 解題―上巻・索引

―下巻 総頁数三六〇頁

定価八千円

## 史料館の役割と史料保存体制

一昨昭和五十六年度に行政管理庁は国立大学および国立大学共同利用機関に対して行政監察を行い、その監察結果に基づく勧告を、昭和五十七年六月に文部省に対して行なうとともに、その報告書を公開した。これには（昭和四十七年に設立された国文学研究資料館に、その附属機関とされた）当「史料館」（昭和二十六年設置）についてふれる箇所があり、昭和五十六年設置の国立歴史民俗博物館における歴史資料収集という事業目的との調整を図ること、および国文学研究資料館の事業活動との関係を指摘している。

右の報告書が発表されて以来、国文学研究資料館および附属機関史料館の評議員会・運営協議員会において、この問題が議された。

またとくに歴史研究にかかわる諸学会・研究団体・研究者は強い関心を示し、日本歴史学協会（委員長および保存利用特別委員会委員長、八月一〇日）、歴史学研究会（八月二三日）、歴史学研究会近世史部会運営委員会（九月一五日）、日本史研究会（九月一八日）、大阪歴史学会（一〇月二

八日）、史学会（十一月二日）、歴史資料保存利用機関連絡協議会（一月一七日）の各会から、文部大臣宛の要望書が提出され、また日本近世史研究者有志一二名による日歴協・歴史諸学会に対する要望書（九月四日）もある。ほかに個人で要望されたこともあるときくし、右にあげた会名に脱漏のあるやを恐れるものである。

諸学会・協会の文部大臣への要望書は、何れも結びとして、史料館と歴史博との基本的な相異点に留意し、広く歴史学界の意見を徴して、両館の事業調整については慎重に勧告に対処することを求めている。

それは第二次大戦後の混乱期に、散逸の恐れのある史料の収集と保存などを目的として、学界の要請に应运て設立された文部省史料館が三十年余、未確立だった史料の整理方法の研究、史料の保存と公開のための目録作成、史料所在情報の調査、収集史料の紹介・翻刻、さらに史料の保存整理知識の普及のための近世史料取扱講習会の開催などにつとめてきた実績を評価して頂いたものと感

謝するものである。

文部省史料館として発足以来、予算規模・人員規模の過小性に悩みながら事業遂行に努力してきたものの、昭和四十七年に国立大学共同利用機関である国文学研究資料館の附属機関と位置付けられたことで、その性格について歴史関係諸学会に対して若干不透明な部分の介在することもあった。しかし本来の業務とくに史料の公開利用には意を用いてきた。

改めて指摘するまでもなく歴史研究において文書館（史料保存利用施設）・図書館・博物館の三者が、それぞれに独自の機能と使命を担って貢献するよう運営されているのが、世界各国共通の事実である。吾国においても図書館と博物館とは法的裏付けがなされているものの、文書館（史料保存利用施設）については根拠法たる「文書館法」が未成立であることからかも知れるように、文書館の性格や機能についての一般的認識は薄く、その実務・運営についての理解も十分とはいえないようである。各地に史料保存利用施設が数多く設置されるようになって今日、生の史料の存在形態、その保存と整理などについて、学理と実務に関する研究は一層その重要性や必要性また緊

急性を増している。

当史料館においては、従来の事業を自己点検するなかで、今日迄果たしてきた当館の役割をより一層、歴史学界に貢献し得るように、かつ各種史料保存利用施設との一層の提携連絡の実をあげることを願って、「機能拡充」についての素案を考えてみた。次に掲げたので忌憚なき御意見を広く頂けるならば幸いである。

国立史料館の機能の拡充について（素案）

（一九八二年九月七日）

### 一、基本的な方向

わが国における近世以降の文書・記録類の保存利用問題については、周知のように、日本学術会議が「歴史資料保存法の制定について」の勧告（一九六九年）、および「文書館法の制定について」の勧告（一九八〇年）を政府に提出しており、県・市町村等、各地域の文書館・史料館を主体にした、全国的な史料保存利用体制の整備が、緊急の課題となっている。

このような状況に対し、全国の史

料保存利用機関および関係諸学会との緊密な連繋にもとづき、今後、特に、以下のような機能・役割を拡充していきたいと考える。

- (1) 全国の近世・近代史料の所在地や地方史関係文献に関する、情報・閲覧サービスの機能
- (2) 近世・近代史料の史料学および史料整理・管理学に関する、研究の機能
- (3) 近世・近代史料の整理管理専門職（アーキビスト）養成のための、研修・教育の機能

## 二、具体的な構想

### (1) 情報・閲覧サービス機能の拡充

イ、史料の収集と収蔵史料の公開  
重要史料のマイクロフィルム撮影による収集は、これまで通り実施する。現物史料の収集は、散佚のおそれのある史料で、他に適当な収蔵機関がないものなど、最小限にとどめる。収蔵史料（マイクロフィルムを含む）については、ひきつづき目録刊行に努力し、閲覧サービスの充実をはかる。また、重要史料の刊行を継続する。

ロ、地方史関係刊行物の収集と公開  
従来より収集を進めている県市町村史類や地方史関係定期刊行物の充実につとめ、早急に公開閲覧体制を整備して、地方史研究文献センターとしての役割をはたす。

ハ、近世・近代史料の所在地に関する情報の収集と公開

全国の史料保存利用機関・大学・研究団体等が作成している史料目録の収集・公開をすすめ（既収集分については、本年10月より公開）、また、各地域の関係機関・研究者と協力して、未調査史料の調査をおこなう。さらに、これらにもとづいて、近世・近代史料の所在地に関するデータカードを作成・蓄積し（現在すでに約三万枚の所蔵者一件別カードを作成済み）、コンピューターを利用した、合理的な情報サービスシステムを整備する。

### ニ、その他のサービス機能

上記のほか、地方史誌・史料集等の刊行情報や、史料学を中心にした研究文献情報を整備する。また、所蔵史料・文献の撮影複製サービス、史料の補修・保存方法や史料解説を含む各種レファレンス・サービスの

充実も、重要な課題である。

### (2) 研究機能の拡充

#### イ、研究の目的・内容

国立史料館においては、科学的な史料保存利用体系の確立に資することを目的として、主として、近世・近代史料に関する基礎的研究（たとえば、古文書・古記録学、古書体学、文書体系論等）、および、史料の整理・管理に関する応用的・実践的研究（たとえば、目録編成法、保存・修復技術、文書館運営論等）の研究をおこなう。

#### ロ、研究の組織・方法

研究は、館員によるもののほか、関連諸機関のアーキビスト等、館外の研究者が参加する共同研究を恒常的に実施し、文書館学の研究センターとしての機能をはたす。また、この分野における国際交流を推進する。

### (3) 研修・教育機能の拡充

イ、史料整理・管理専門職（アーキビスト）の養成

従来実施してきた近世史料取扱講習会を継続させるとともに、各史料保存利用機関の史料整理・管理専門

職（アーキビスト）のための、恒常的な研修の機会を設ける。

#### ロ、大学院教育への協力

大学院その他における、史料学ならびに史料整理・管理学の教育に協力する。

### 三、関連諸機関・諸学会等との関係

以上の構想を実現するためには、国立公文書館・国立歴史民俗博物館・東京大学史料編纂所等の国立関係機関、および、全国の史料保存利用機関・大学等との協力体制を整備することが不可欠である。同時に、研究者・関係諸学会との間で十分な協議をおこない、その合意を得ることが必要である。以上



## 第八回歴史資料保存利用機関連絡

### 協議会大会に参加して

安藤 正人

一九八二年度の歴史資料保存利用機関連絡協議会（史料協）総会・研究会は、去る十一月十七日と一八日の二日間、四月に新設されたばかりの群馬県立文書館（前橋市）と伊香保グランドホテルを会場として開催された。会議は群馬県立文書館での総会のと伊香保に移動して研究会に入り、まず一七日は共通論題として、①群馬県立文書館阿久津宗二氏「行政文書の収集と整理について」、②岐阜県歴史資料館伊藤克司氏「古文書の収集と整理について」の二報告があり、討議が行なわれた。次いで一八日は、二つの分科会に分かれ、①東京都公文書館水野保氏「情報公開と文書館のかかりについて」、②北海道総務部行政資料課佐々木浩氏「文書館設立のすすめ方と問題点について」の二報告をめぐって、それぞれ活発な討議が行なわれた。報告・討論ともにいずれも有意義なものであったと思うが、詳細は近く発行されるであろう史料協の会報に譲りたい。ただ研究会の全体構成につ

いて一言希望を述べると、分科会はもう少し少人数とし、史料整理・管理論等に関するもつと実務的な議論をしてみたい。如何であろうか。

さて、会議の内容とは別に、一、二記しておきたいことがある。ひとつは参加層の問題である。今回の参加者は、北は北海道から南は沖縄まで合計一〇九名で、このところ毎年百名を超えている。所属別の内訳では、国立が二機関六名、県立が二八都道府県三六機関七四人（県史編集室・県総務部文書課等も一機関として数えて）、市区町立が一五市一区一町計一七機関二四人、地区立が一機関一人、大学その他が四人となっている。都道府県関係者が多いのは、このレベルで文書館設立の動きが最も進んでいるためであり、今回も北海道・栃木・愛知など具体的な設立計画を持っている地域からの大量参加が目立った。そういう意味で、史料協が文書館設立のための情報交換の場として大いに役立っているという印象を受けた。しかしながら、逆

に市町村の歴史民俗資料館等からの参加者が全く無いのは大きな問題である。市町村レベルでは、ごく一部を除けば独立の文書館構想を持っていないところはほとんどなく、むしろ考古・民俗分野の博物館機能を中心とした歴史民俗資料館を作り、これに部分的に文書館機能を持たせようとしているところが多いように見受けられる。そして事実、このような歴史民俗資料館の建設が文化庁の補助事業として全国各地で続々と進められつつあるのである。市町村の場合は財政上の事情等もあるし直ちにこのような機関に反対するものではないが、文書館設立運動・文書館法制定運動がいずれ市町村レベルに及んでいかざるを得ないことを考える時、歴史民俗資料館の存在は、やはり重大な問題となる。そのためにも、こういった機関に対し、史料協としても積極的に参加を呼びかけるべきであろう。

ところで、国のレベルでも、博物館機能と文書館機能の一つの機関の中に統合してしまうという動きが最近出てきた。本誌別掲記事に概略を紹介してあるが、行政管理庁による国立歴史民俗博物館と国立史料館の「統合」勧告問題である。これに

ついては今回の史料協総会でも文書館設立運動全体に関わる重大問題として取り上げられ、その結果、史料協として文部大臣宛の要望書を提出することになった。その要旨は、①図書館・博物館・文書館の三館は、本来それぞれ独自の機能と使命を有していること、②国立史料館は近世・近代史料の文書館としての独自の機能と、史料を取扱う専門的職員の養成機能を果たしてきたこと、③全国における文書館設置の動きの中で、国立史料館の右のような機能の重要性が増していること、④よって史料館と歴史民俗博物館との統合は実情を無視したものであること、というものであった。史料館のこれまで果たしてきた役割についての評価はさておき、国のレベルで文書館の独自の存在意義が否定され博物館の付属物で事足りるということにでもなれば、この「行革」の世の中である、たちまち地方自治体の悪いお手本となり、全国の文書館設立運動の阻害要因にもなりかねない。史料協が、実際に史料保存管理業務に携わる専門職の唯一の団体としての立場から、今後とも右の問題に積極的に発言をされるよう、心からお願いしておきたい。

# 史料所在 調査報告

安芸国 都志見村香川家文書  
山県郡 (現、広島県山県郡豊平町)

昭和五十七年九月三、四、五日に広島県山県郡豊平町都志見一四〇一、香川慶三氏所蔵文書について本年度の史料所在調査を実施した。調査には広島大学総合科学部教授渡辺則文氏、広島県史編さん室専門員土井作治氏、広島女子大学文学部助教教授堤正信氏、広島大学文学部助手谷山正道氏、広島県佐伯郡宮島町教育委員会町史編さん室専門員佃雅文氏に調査員を委嘱し、また広島県山県郡千代田町史編さん室編さん員六郷寛氏が特別参加された。当館からは藤村潤一郎、大藤修が同行した。調査に当つてはその具体化を渡辺氏に依頼し、同氏と土井氏が史料所蔵者との交渉、調査の準備、実施と大変お世話下さった。また調査をご快諾下さった香川氏をはじめ、豊平町教育委員会社会教育主事兼社会教育係長圓山龍溪氏にもご援助をいただいた。改めて篤く御礼申上げたい。

調査対象の都志見村香川家は文政八年八月、頼惟柔(杏坪)序「芸藩通志」(昭和四十二年複製版三巻)巻五十八―九によると、同村は「広三十

一町、表十八町、東北の間瀧山高く秀て、南西より東も亦山あれど高からず、西字川西町界を通じ、一水これに入り、又一水は吉木村に入る、民産農を主とし、工商傭夫の類少し」とあり、百三町六段、七二五石七斗二升三合、二八二戸、一七六八人、牛一七八隻、馬一二匹である。

巻六十一の故家に「都志見村香川氏 先祖沼田郡八木故城主香川氏と同じく権五郎景政を以祖とす、中世弥五郎景之當国探題武田家に属す、孫雅楽武景まで戸谷村に居、其子九郎右衛門景純農戸となりて長笹村に移る、其子七郎兵衛景高弘治年中都志見村に移る、今の長兵衛まで七世」とある。

つぎに後藤陽一監修「広島県の地名」日本歴史地名大系35によると、同家は農業の傍ら近世初頭から鉱山業、酒造業に従事し延宝七年所持高二八石六斗六升二合で家数三二(本家一、鍛冶屋一、同小屋一、門一、下人家二三、土蔵四、藁屋四、牛馬屋七)、人数一〇三(男五二、女五一)で鉄山職人も家族内に含む。分家長

兵衛は高二三石一斗七升、下人屋三である。両家共同の鍛冶屋は都志見村一、雲耕村二であるが、天保六年には六軒である。

なお都志見村は慶長六年検地により高七二五石七斗二升二合で以後変更はない。広島藩領で明知である。この他香川家文書によると、近世には香川家は都志見村の年寄格、庄屋戸谷村の庄屋を勤めている。現在は農林業経営である。

調査に際して、時間的に全文書を史料目録化する事はできなかったが、香川家のご好意と調査員のご尽力によりほぼ同家文書の全様を発掘できたと思う。

文書の調査点数は一四二二点で、その内訳は大略で八〇三冊、一一一七通、二九綴、一三四括(袋)であり、時期的には近世初期から昭和期に及ぶ。

まず(支配)関係は巡見使、船法度、国郡志、内密御用であり、(土地)関係には田畑、腰林、山、家屋敷売券、地券、山法式、所持地控、作徳米、小作証文がある。

(貢租)関係には万治一承応期の庭帳と年貢上納覧、高物払つなき帳つなき日記、出符、上納勘定、免割見分、皆済、拝借米、御用銀、年貢

算用状、納切手、及び鉄方炭運上、鉄山方札運上があり、最後の鉄山方では都志見村以外に戸谷、上石、下石、今吉田村のものもある。

(村)関係では差出帳、諸書付扣、村方算用帳、十人組、御指令綴、諸願届同控があり、(戸口)関係は人馬牛馬御改帖、戸籍控である。

(治安)関係は、三国屋掛合、諸一件出入であり、(凶荒救恤)関係は不作見分、引米がある。(土木・建設)関係は戸谷村の水車溝代に関するものが多い。

(産業・職業)関係の中で、鉄関係としては大暮鍛冶屋、郡中鉄山方長沢鑪、鋳物師、溝口村長割鍛冶屋があり、酒造としては郡中酒屋、仕酒造株添証文がある。酒造の後者には加計村関係がある。

(金融・貸借)関係は借銀、手形控、頼母子、金銀札奥出入控で、(商業・売買)関係には金銀出入、御通金穀并万物取引帳、家畜市場法規がある。(家)関係は家訓、奉公人、日記、祝儀、法事、普請、諸入用で、(地図・絵図)として入会、耕地に關するものがある。(学芸・医療)関係は家業の大正・昭和期の売薬が纏っている。(雑)関係は明治以降の家計関係である。

# 史料所在 調査報告

## 三河国 乗本村菅沼家文書ほか 八名郡

本年度の史料所在調査の一つとして、昨年一月一日から一三日まで豊橋市の市立美術博物館および愛知大学総合郷土研究所が所蔵する文書を調査した。調査は、愛知大学教授歌川学氏を中心に、豊橋市史編さん事務局から河合正樹・伊奈利定・歌川洋子の三氏、豊橋市美術博物館の後藤清司氏に委嘱して実施したが現地では愛知大学の山本敦子・村上知香子両氏にもご協力いただいた。なお当館からは原島が参加した。

今回の調査は、当館が所蔵する八名郡乗本村(現、鳳来寺町)菅沼家文書の現地残存史料について情報を収集している過程で、前記二機関にその一部が収蔵されていることを知ったため、所蔵史料の関連追跡調査を兼ねて実施したものである。

八名郡乗本村菅沼家文書(豊橋市美術博物館蔵)

本文書は、豊橋市史編纂にも深く関与した故近藤恒次氏が収集した史料群の一つで、現在は図書類とともに同館の所蔵に帰し、氏の別号に因み橋良文庫と称される。なお、同文

庫にはほかに、赤坂宿関係史料、新居宿関係史料、三州遠州諸史料、前芝村加藤家文書がある。

乗本村は豊橋の北東二五km、村高五六〇石余(内本田畑一五〇石)の七割が畑地という山間の村落で、小川組以下の八組に分かれる。菅沼家は名主を勤めたこともあり、回漕業のほか材木・茶等の商業を営んだ。史料は、元禄一六年の村指出、享保一四年の五人組帳をはじめとする村方史料が約七〇点。豊川の舟運に使用した鵜飼船の関係史料として仲間掟や分一運上調、舟売買証文など。小川村の店出を含む商用勘定帳簿類約八〇冊は、当館所蔵の欠年分を補うものである。ほかに、系図・祝儀帳と明治期の養蚕関係史料。三一八冊、一四〇通、二枚、三括。

愛知大学総合郷土研究所昭和五十七年度収集史料

本史料は、豊橋市内の古書店から収集したものである。同店は県内および隣接地域から多年にわたり史料類を入手しており、前記橋良文庫のうちにも同店を経由した史料がある

という。今回の史料は同店の手もとに蓄積されたもので、各地の史料が混在した状態となっていた。従って作業は旧所蔵者別に仕分けることから始め、以下の一件について細目を採録した。なお、今回の調査日程では仕分け後の目録化に至らなかった数件の文書が残っている。

◇吉田藩家中・町方文書 大河内家系図、武芸伝授目録、砲術書のほか家中および町人の米金借用証文、土地譲渡証文、吉田宿助郷関係史料など一七八点。

◇渥美郡大岩町山本家文書 同家の屋敷・土地買入証文(寛文・明治) 借金証文とこれの関連史料、嘉永三年の家相図、明治期の内国通運豊橋分社経営関係史料など九十九点。

◇田原本町広中家文書 五一点の四五点が借金証文(延宝・明治)。田地・屋敷の売渡証文三通と蔵米送状など。

◇渥美郡高塚村小野田家文書 天保一二年の免状(後欠)と借金証文、売薬行商願など一五一点。

◇八名郡乗本村菅沼家文書 被仰渡の請書や質屋名前書上帳など数点のほかは私文書で、延宝九年の舟手形奉公人請状、明治期の材木商売帳簿類などである。当主の古稀・追善の

折の詩章三四点を含む。一六冊、一五六通。

◇設楽郡海老村土屋家文書 土屋家宛の山林・立木売渡証文と借金証文(文化・慶応)三五通に、正徳六年の屋敷売渡証文ほか八通。

◇宝飯郡埴之上村文書 明和・文政間の村送り・村請一札が大半を占めこれに寺送りを含む。ほかに年貢納入通、訴願書、勘定書付など約三〇通で、合計一八五通と断簡類五四通。以上のほかに、一件文書としてまとめるには少量な史料や、旧蔵者を確認できない史料があり、それらは旧郡別に一括して整理した。渥美・八名・設楽・宝飯の四郡である。その内容は借金証文・土地売渡証文の類が圧倒的に多いが、そのほかは免状、年貢請取、訴願書、起請文、奉公人請状など多岐にわたっている。

最後に、今回の調査につき、所蔵史料の閲覧をご快諾下さり調査に便宜を与えていただいた豊橋市美術博物館および愛知大学に深く感謝申し上げますとともに、設営から実施までに多大のご尽力をいただいた歌川氏をはじめ、調査にご協力下さった各位に対して心からお礼を申し上げる次第である。

## 昭和五七年度 新収史料紹介

①はマイクロフィルムによる収集を示す。

### 受贈史料

越後国頸城  
郡岩手村 佐藤家文書

本文書は、当館が以前より所蔵している佐藤家文書と本来一体を成すものであり、今回、新たに佐藤家より寄贈を受けたものである。以下、受贈に至る経過について、若干説明しておきたい。

当館が以前より所蔵している佐藤家文書（大肝煎・庄屋文書）約七千点は、一九五三年に東京の古書店から購入したものであるが、今回、新たに『史料館所蔵史料目録第三十八集』として冊子目録を刊行することになり、そのための参考調査として、昨年九月、佐藤家御当主友之氏（東京在住）と共に、新潟県中頸城郡柿崎町大字岩手の旧佐藤家屋敷（現在、太田建一氏所有）の調査を行なった。その結果、土蔵から新たにダンボール約十箱分の残存文書が発見され、佐藤氏は太田家の了解のもとに、これを当館に寄贈したい旨申し出られたのである。当館では慎重に検討した結果、①佐藤氏は現在東京に居住

引き渡しを受け、直ちに当館への移送を行なったのである。

以上が受贈に至る経過であるが、史料の内容については、既収蔵分と共にできるだけ早く冊子目録を刊行する予定なので、それを見られたい。ただ概観するところ、既収蔵分が近世の岩手組大肝煎文書・岩手村庄屋文書を中心としているのに対し、今回の新収文書は逆に明治期の書簡・証文・金銭勘定書等、いわゆる私文書が主のようである。しかし、慶長三年の岩手村検地帳をはじめ、文政期以降の岩手村年貢割付状など、既収蔵分の欠を補う基本史料も多く見られ、いづれにせよ今回の受贈史料によって佐藤家文書が一段とまとまりのある文書群になったことは疑いをいれない。

最後になったが、貴重な史料を快く寄贈下さった佐藤友之氏と、御尊父佐藤八平氏をはじめとする御家族の方々、ならびに、これまで長い間史料を散逸・汚損からお守り下さり、今度の移送にあたっても協力を惜しまれなかった太田建一氏とその御家族の方々に、心よりの敬意と謝意を表したい。（旧蔵者―東京都港区虎ノ門四―三―二 佐藤友之氏。推定約三千点）

### ②阿波国 板野郡 斎田村山西家文書

阿波国撫養塩田を背景に、幕末―明治期に塩大問屋兼船持として活躍した山西庄五郎家の経営史料が、現在も山西孝枝氏宅に六一冊、所蔵されている。

当史料館にも「祭漁洞旧蔵水産史料」（史料館所蔵史料目録第8集のうち）に「山西家文書」二七冊が架蔵されている。併せて八八冊となる。

昭和17・18年頃に、それまでの母屋や土蔵を解体して、表通りにあった二階造りの船頭宿舎（幕末の建築）を引き移したということをつたうたので、あるいはその頃に流出したものを、渡沢氏が入手されたのかとも考えられる。

鳴門市史上巻昭和51年刊の塩業編には当館架蔵の山西家文書が引用されており、また同巻商業編には現地の山西家文書が利用されている。また上村雅洋氏は「近世阿波における廻船経営と手船化の一例」（大阪大学経営学28―1）・「幕末期における廻船経営の一面面」（大阪大学経営学29―1）において当館架蔵の山西家文書を分析され、ついで泉康弘氏は鳴門市史編纂事務局預託の二一冊の他にも、山西家になお四〇冊が残され

ていることを確認され、「瀬内海水運による阿波藍の流通」(渡辺則文編『産業の発達と地域社会』所収、昭57刊)において、山西家文書の分析を果たされた。

泉康弘氏の御好意によつて、現地の山西家文書の存在を知ったことから、当館架蔵山西家文書を補充して広く研究者に対する便宜をはかることを目的として、現地山西家文書のマイクロフィルム化が立案され、昭和57年度史料収集事業の一環として、マイクロフィルム撮影を実施する運びとなった。

昭和57年10月4日より9日にかけて行なつた撮影作業は、市史編纂事務局預託の二冊に止まつたので、次年度においても引続いて、マイクロフィルム収集の実施を予定している。

撮影実施に当つては、所蔵者山西孝枝氏、ならびに鳴門市史編纂事務局々長橋本啓司氏を始めとする編集室の各位、そして泉康弘氏らの御高配を得ることができた。記してあつく御礼申上げるものである。

(現蔵者)山西孝枝氏、鳴門市撫養町斎田大堤4-1。一部預託先鳴門市史編纂事務局、鳴門市撫養町南浜字東浜一七〇、一七リール、一〇

## 受贈図書

## 昭和五十六年度(三)

長野県教育史 第十六巻〔長野県教育史刊行会〕

尾張旭市誌 資料編・文化財編

(岐阜県) 美並村史 通史編 上巻

(岐阜県) 大野町史 史料編

春日山城と上杉謙信〔花ヶ前盛明〕

越谷市史 統史料編

わたしたちの郷土こしがや 第一集〔越谷市教育委員会〕

(茨城県) 牛久町史 中世編・史料編(一)

(一)〔牛久町教育委員会〕

史跡散策——牛久町郷土史考〔同右〕

(茨城県) 筑波町史 史料編 第四編

(北海道) 音更町史

(北海道) 物語虹田町史 第二巻

大宰府・大宰府天満宮 文書展〔大宰府天満宮文化研究所〕

室蘭のうつりかわり

新室蘭市史 第一巻

(宮城県) 迫町史

(同右) 迫町史資料集 第三巻

大館市史 第四巻

(秋田県) 森吉町史資料編 第十集

山形市史資料 第62・63号

(山形県) 最上町史編集資料 第四・六

号

(福島県) 保原町史 第四巻

茨城県史 市町村編III

史料調査報告 第十二・十三集

矢板市史

(埼玉県) 毛呂山町史

(埼玉県) 大井町史料 第13・14集

東松山市史編さん調査報告 第23集

千葉県市原市地名集〔市原市教育委員会〕

市原市史資料集〔中世編〕〔同右〕

東京市史稿 市街編第七十二・産業編第二十五

都史紀要 二十八〔東京都〕

神奈川県史 通史編 1・2・6・別編2

藤沢市史 年表編

(新潟県) 小出町歴史資料集 第一集〔小出町教育委員会〕

岡崎市の蛾〔岡崎市教育委員会〕

羽曳野市の文化財〔羽曳野市教育委員会〕

赤穂市史 第一巻

沖繩県史料 前近代 1

築田氏家譜と古文書〔築田英雄〕

神陰年譜〔笠間稻荷神社〕

日本人の折り 小絵馬〔奈良県立民俗博物館〕

物館

岡本秋暉展〔小田原市郷土文化館〕

江戸時代の旅〔大田区立郷土博物館〕

岩手県立博物館展示資料目録

岩手の大給馬展〔同右〕

郷土の甲冑と刀展〔同右〕

江戸のよそおい〔同右〕

松平春嶽公手沢・愛蔵品展〔福井市立郷土歴史博物館〕

北上市史 第六・第七巻

角館誌 第十巻

鹿角市史資料編 第五・六集

大畑窯跡発掘調査報告書〔南外村教育委員会〕

上山市史編集資料 33

天童市史編集資料 第二十四・二十七号

南陽市史編集資料 第6号

鹿の子C遺跡〔茨城県教育財団〕

伊勢崎市制四十年誌

(埼玉県) 寄居町史資料集 寄居町の自然動物編

中川低地遺跡確認調査報告書〔草加市八潮市史編さん室〕

武蔵府中叢書 14〔府中市〕

明治八年四月公用書留稿本〔田無市立中央図書館〕

伯江市史料集 第十四

府中市郷土資料集 5〔府中市教育委員会〕

福生古文書研史料 五号〔福生市古文書研究会〕

横浜市文化財調査報告書 第八輯の十

七・十八(横浜市教育委員会)

鎌倉国宝館図録 第二十四集

板尾市史 別巻II・年表索引

(新潟県) 栄村誌 上巻

(新潟県) 真野町の文化財 I・II(真野町教育委員会)

(新潟県) 頸城村の文化財 第二集(頸城村教育委員会)

(石川県) 内浦町史 第一巻

掛川市史資料集 近世編

豊田市史 九

新修稲沢市史 研究編 三・四

刈谷町庄屋留帳 第七巻(刈谷市教育委員会)

一宮 一九八一 市勢要覧

京都市史 編年綱目 第一・二巻

津山市史 第六巻

大分県文化財調査報告書 第四十三・五

十一輯(大分県教育委員会)

土岐市史 三上・下

日本外交文書 満州事変 第三巻(外務省)

大日本古記録 民経記三・後愚味記一(東京大学史料編纂所)

大日本近世史料 幕府書物方日記十五

(同右)

日本関係海外史料 イギリス商館長日記

訳文編 付録上(同右)

大日本古文書 幕末外国関係文書之三

八(同右)

大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料

十二(同右)

花押かがみ 二(同右)

統計資料シリーズ No.21(二橋大学経済研究所)

日光東照宮三百五十年祭誌

独協百年 第五号(独協学園)

歴史への招待 19(日本放送協会出版局)

日本歴史展望 第9巻(旺文社)

中学歴史資料年表(吉野教育図書)

雇用と職業 37・38(雇用職業総合研究所)

日本貨幣略史 索引(日本銀行)

貨幣年表(同右)

図録都市生活史事典(柏書房)

池田家文庫等貴重資料展(岡山大学附属図書館)

江戸末期・明治初年の草双紙・小説(同右)

法隆寺展聖徳太子三千三百六十年御諱記念(奈良国立博物館)

法隆寺献納金銅仏(同右)

天守閣復興五十周年記念 大阪城展(大阪城天守閣)

自由民権期の横浜展(横浜開港資料館)

旧石器時代の東北展あんない(東北歴史資料館)

旧石器時代の東北(同右)

ヨローパ・アメリカガラス名品展(サン

トリー美術館)

サントリー名品 100(同右)

上杉藩遺宝展(山形県立博物館)

多摩の神道・垂迹美術(八王子市教育委員会)

高知相互銀行五十年史

東京商工会議所百年史

大阪商工会議所百年史・別冊共

大津商工会議所百年史・別冊共

文書による郷土的なレファレンス質問に

対する回答事例 第一(仙台市図書館)

国典類抄 第十八巻(秋田県立秋田図書館)

本間家土地文書 第七巻(農業総合研究所)

山形県教育史資料 統計編 第二巻(山形県教育委員会)

岩槻市史 近世史料編II

新編武蔵国風土記稿寺院堂庵書上 旧比

企・横見・入間郡(東松山市)

石佛 東松山市石造記念物調査報告(同右)

青梅市史史料集 第二十八号(青梅市教育委員会)

甕つた古民家 旧長崎家主屋保存の記録

(世田谷区教育委員会)

広報しながわ 縮刷版No.1

隠岐騒動関係資料(藤田 新)

富山県歴史の道調査報告書 飛騨街道

(その2) 五箇山・立山・永見能登

道(富山県教育委員会)

「大野藩の蝦夷地開拓と大野丸」に関する史料(天野俊也)

(山梨県) 丹波山村誌

真田家文書 上巻(長野市)

岐阜市史 通史編 現代

無然遺稿 一・二巻(岩本康隆)

袋井市史 史料編一

静岡市史 原始古代中世

(愛知県) 師勝町史 増補版

史料京都の歴史 12(京都府)

河内四糸史 第一・四冊・写真集

明石市史資料 第一集(一)・第二集上・下巻

(明石市教育委員会)

宝塚市史 第八巻

鎌倉蔵院遺物(奈良市)

(鳥取県) 福部村誌

歴史の道調査報告書 萩往還・(資料編)

共(山口県教育委員会)

久留米藩土器司田中家資料(田中 定)

おおいの風土と文化(大分県教育委員会)

会)

宮崎県歴史の道調査報告書 米良街道

飯肥街道・鶴戸街道・志布志街道(宮崎県教育委員会)

鹿児島県文化財調査報告書 第二十二

〜二十五・二十七・二十八集(鹿児島県教育委員会)

史料調査報告 第十四・十五集(足利藩研

究会)

(群馬県) 南牧村誌

川越市史 第五卷 現代編Ⅱ  
八潮市史調査報告書 5  
国分寺市史料集 Ⅱ  
日野市史史料集 古代中世編・板碑編  
石川県史資料 近代篇(8)  
石川県尾口村史 第三卷  
小浜市史 諸家文書編三  
新修神安水利史料(神安土地改良区)  
広島県史 近世Ⅰ 通史Ⅲ  
宮崎県文化財調査報告書 第24集(宮崎県教育委員会)  
鹿児島県植物方言集(鹿児島県立博物館)  
図書館かたりべ双書 第一集(弘前市立弘前図書館)  
仙台市文化財パンフレット 第6集(仙台市教育委員会)  
仙台市文化財調査報告書 第34集(同右)  
山形市史 年表・索引編  
(山形県) 西川町史編集資料 第十二号  
(西川町教育委員会)  
新座市史調査報告書 1・2  
朝日之舎日記(川越市市史編さん室)  
(千葉県) 三芳村史編集資料 Ⅱ  
練馬区史 現勢編  
崩橋遺跡・霞台遺跡群(青梅市遺跡調査会)  
弁天橋遺跡(八王子市弁天遺跡調査研究会)  
東京・八王子石川天野遺跡(八王子市石川天野遺跡調査会)

春日山城(花ヶ前盛明)  
高田城(同右)  
居多神社と越後国一宮(同右)  
大阪市史史料 第五輯  
三原市史 第五卷  
防長寺社由来 第一卷(山口県文書館)  
(高知県)中土佐町史料 1・2・5・7・9・12(中土佐町教育委員会)  
(同右) 中土佐町の史跡と文化財(同右)  
(同右) 中土佐町文化財調査報告書 第1・3集(同右)  
写真集 中土佐の今昔(同右)  
鹿児島県史料 旧記雑録後編2・斉彬公史料第二巻(鹿児島県新史料編さん所)  
文化財調査報告 第九輯(九重町教育委員会)  
現代陶芸(サントリー美術館)  
稲荷山やかんきん三代の人々(和田元三郎)  
石代値段と米価の相関性(岩橋勝)  
房総地方の捕鯨史料(相沢文庫)  
日本塩業大系 原始・古代・中世(稿)(日本専売公社)  
高村豊周作品集 鑄(高村豊周作品集刊行会)  
憲政史特別展 第五回展示目録(憲政記念館)  
燈火具のうつりかわり(磐舟文華博物館)  
内閣文庫所蔵 正保城絵図 Ⅱ―3・4

会津藩家世実紀 第八巻(歴史春秋社)  
群馬県史 資料編3  
新編埼玉県史 資料編2・別冊  
薬師如来像修理報告書(世田谷区教育委員会)  
ひとびとの折り(同右)  
小田原(中村静夫)  
佐渡相川の絵馬(相川郷土博物館)  
敦賀市史 史料編 第四巻上  
刈谷町庄屋留帳 第八巻  
藤井寺市史 第五巻  
青森県立郷土館調査報告 第12・13集  
八戸市史 史料編 近世10  
国典類抄 第二巻(秋田県立秋田図書館)  
秋田県教育史 第二巻(秋田県教育委員会)  
会  
南陽市史編集資料 第7号  
山形県議会史 第六巻  
取手市史 近世史料編Ⅰ  
郷土を知るための手引(藤代町教育委員会)  
新編埼玉県史 資料編23  
越谷市史 統史料編(二)(越谷市教育委員会)  
会  
第17回郷土史講座講義録(船橋市郷土博物館)

伊予吉田郷土史料集 第四輯(吉田町教育委員会)  
捕鯨史考(東典一)  
法と政治の現代的課題(大阪大学法学部)  
大阪経済史研究(統共)(大阪経済大学日本経済史研究所)  
関西大学東西学術研究所資料集刊 十ノ三(六十一ノ二・十二ノ一)三  
東西学術研究所創立三十周年記念論文集(同右)  
千葉県議会史 第四巻  
柏江市史料集 第十五  
写された港区 二(東京都港区立みなと図書館)  
(新潟県) 栄村誌 下巻  
柏崎市史資料集 考古篇2  
魚津市史 史料編  
図書館郷土資料叢書 (13)(沼津市立駿河図書館)  
沼津資料集成 9(同右)  
岐阜大学教育学部郷土資料 (13)  
(愛知県) 高豊史  
新修稲沢市史 研究編六  
向山遺跡・谷上古墳群発掘調査概報(浜松

## 昭和五十七年度 (一)

市教育委員会

愛知大学総合郷土研究資料叢書 第三集

埋蔵文化財発掘調査概報 一九八一第一

分冊・第二分冊(京都府教育委員会)

新編香川叢書 民俗篇(香川県教育委員

会)

龍野市文化財調査報告書 III(龍野市教

育委員会)

鹿児島県史料 豊後名勝考(鹿児島県維

新史料編さん所)

南日本文化研究所叢書 7

日置地区有形民俗資料調査報告(鹿児島

県明治百年記念館建設調査室)

守屋舎人日帳 第四卷(文献出版)

雇用と職業 39(雇用職業総合研究所)

学力・行動・性格の追跡的研究(岡山大学

教育学部)

新収日本地震史料 第二巻・別巻(東京大

学地震研究所)

石炭研究資料叢書 第三輯(九州大学石

炭研究資料センター)

船橋市郷土資料館 第30回・31回展示

資料観覧の手びき

桶・樽—その伝統と桶職人の技術—(青梅

市郷土博物館)

埼玉県立博物館展示解説 民俗

特別展図録 板碑(同右)

BEITRÄGE ZUR JAPANOLOGIE  
Band 17(ウィーン大学日本文化研究

日本塩業大系 史料編 古代・中世(一)

補遺(日本専売公社)

北海道所蔵簿書件名目録 第2部(その

12)(北海道総務部行政資料課)

北海道刊行政資料目録 第15号(同右)

北海道大学附属図書館所蔵北海道関係地

図・図類目録

釧路市立郷土博物館収蔵資料目録 (I)

教育研究資料件名目録 XII(北海道立

教育研究所)

札幌商科大学図書館蔵書目録 第2巻

北海学園大学増加図書目録 第15・16号

三浦家文書目録(北上市立図書館)

鍵屋文書目録(同右)

江刺市立図書館郷土資料目録 No.2

宮城教育大学所蔵和漢書古典目録(統

共)

宮城県郷土資料総合目録—県人著作・行

政資料編—(宮城県図書館)

仙台市民図書館郷土資料目録 第一

秋田県歴史資料目録 第十八集(秋田県

立秋田図書館)

秋田県立博物館収蔵資料目録 歴史II

山形県関係文獻目録(追録5)(山形県

立図書館)

山形県関係新聞記事索引 昭和56年度版

(同右)

歴史資料館収蔵資料目録 第10集(福島

県文化センター)

蔵書目録 第25集(福島県立図書館)

栃木県立図書館蔵書目録 第五巻

小山市史料所在目録 第7集

栃木県史料所在目録 第11集

伊勢崎市史料所在目録 豊受I・三郷・

殖蓮I・市立図書館

群馬県近世史料所在目録 15・18

増加図書目録 昭和55年度(伊勢崎市立

図書館)

(群馬県) 大泉町古文書目録(大泉町誌編

さん室)

(群馬県) 邑楽町古文書等所在目録 第

一・二集(邑楽町史編纂室)

埼玉県史料所在目録 第三集

史料目録 第4集(岩槻市史編さん室)

千葉県史料調査報告書 3

医学古書目録 予備版(千葉大学附属図

書館)

船橋市史料所在目録 (2)

松戸市古文書目録 (1)・(2)

成田市史料所在目録 (2)

成田図書館蔵書分類目録 (第七編)

成田山靈光館資料目録 第1集

鴨川史料目録(一)(鴨川市立図書館)

(千葉県) 袖ヶ浦町史料目録 昭和地区

編・長浦根形地区編・関連地区編

現代政治史料目録 2(国立国会図

館)

東京経済大学所蔵大倉財閥資料目録

東京都公文書館所蔵庁内刊行資料目録

17

東京都立中央図書館蔵書目録 補遺I

旧武蔵国多摩郡新町村名主吉野家文書目

録(東京都教育庁社会教育部文化課)

松本文庫目録 図書部(東京都立大学

附属図書館)

明治大学刑事博物館目録 (別冊)

東洋大学雑誌所蔵目録 一九八一年版

新収図書目録 一九八〇年度版(共立女

子大学図書館)

古文書目録 第三・四集(小平市図書館)

東大和市古文書目録 (1)(東大和市教育

委員会)

静岡県周知郡春野町所在文書目録 II

(国学院大学地方史研究会)

芭蕉記念館所蔵資料目録 第1集

新潟県新井市西条原田家文書目録(慶應

義塾大学古文書研究会)

神奈川県立図書館蔵書目録 和書の部第

十一

秦野市史料所在目録 第3・5集

新聞記事目録 第3集(同右)

茅ヶ崎市史料所在目録 (6)

神奈川県関係新聞記事索引 第20集(神

奈川県立文化資料館)

横浜市立大学図書館増加図書目録 和漢

書・洋書 昭和54年度・昭和55年度

神奈川大学図書館蔵書目録 昭和

55年・洋書 昭和55年

神奈川大学図書館雑誌目録 昭和46年度

版追録



藤沢市教育文化研究所収蔵民俗資料関係

目録

新潟県行政資料目録 昭和56年版(新潟

県立新潟図書館)

(新潟県) 小出町歴史資料集 目録編

第1集(小出町教育委員会)

金沢大学所蔵逐次刊行物総合目録 一九

八一年版

加越能文庫解説目録 下巻(金沢市立図

書館)

石川県高等学校図書館郷土資料総合目録

(石川県高等学校図書館協議会)

俱利伽羅依屋文書目録(津幡町教育委員

会)

山梨県立図書館所蔵古文書目録 4

山梨県立図書館増加図書目録 第二巻

岐阜県所在史料目録 第8・9集(岐阜県

歴史資料館)

岐阜県史料調査報告書 第2号(同右)

蔵書目録(蛭川村教育委員会)

静岡県立中央図書館所蔵古文書目録

静岡県行政資料目録(昭和54年度刊行分)

(同右)

御殿場市史料所在目録 第15・16集

沼津市立駿河図書館核資料目録

金岡村役場文書目録(同右)

(静岡県) 新井町の古文書 目録編1

3(新井町教育委員会)

(静岡県) 新居町史料館所蔵資料目録

(新居町教育委員会)

新居町近代役場文書目録 明治大正編

1(新居町史編さん委員会)

高木家文書目録 巻四(名古屋大学附属

図書館)

愛知図書館蔵書目録 第1巻(愛知県文

化会館)

名城大学蔵書目録 第九巻

蔵書目録 第4集(一宮市立豊島図書館)

有隣舎和装本目録(同右)

尾鷲組大庄屋記録目録(再版)(伊藤 良)

須賀利浦方文書目録(同右)

大曾根浦方文書(同右)

滋賀県刊行物目録 No.12(滋賀県立図書

館)

滋賀県地方行政資料目録 No.13(同右)

滋賀医科大学古書目録

小早川文庫目録(京都大学法学部)

上京区関係文書目録・解説(京都市)

(京都府) 網野町文化財目録(その二・

三)(網野町郷土文化保存会)

若宮八幡宮所蔵現存古文書目録(神道史

学会)

大阪市立中央図書館蔵書目録索引 第三

巻

関西大学図書館シリーズ 第二十・二十

一輯

日本キリスト教団大阪教会所蔵資料目録

長興寺村大伊勢講文書目録(豊中市立岡

町図書館)

豊中郷土史料目録 (II) (IV)(同右)

兵庫県史古代資料収集目録 1~42

兵庫県史中世資料収集目録 1~199

兵庫県史近世資料目録1~258

兵庫県史中世資料収集目録

県政資料総目録(追録)(昭和56年)(兵庫

県企画部統計課県政情報資料室)

兵庫県行政資料目録 市町の部(兵庫県

立図書館)

松本海軍文庫目録(神戸市立中央図書館)

姫路市史編集資料目録集 1~11

相生市史編集資料目録集 第五・六号(相

生市教育委員会)

赤穂市史編集資料目録集 (1)・(3)・(11)

尼崎市立地域研究史料館所蔵雑誌目録

一九八二

東大寺文書目録 第三巻(奈良国立文化

財研究所)

奈良県古文書目録(奈良県教育委員会)

奈良教育大学増加図書目録 8

奈良市行政資料目録 第2集(奈良市史

編集室)

奈良市史資料所在目録 第2集(同右)

奈良市史地図目録 第2集(同右)

奈良市史所蔵文書目録 第2集(同右)

奈良市史蔵書目録 第2集(同右)

和歌山県古文書目録 V~7・9(和歌山

県教育委員会)

(和歌山県) 那賀町史料目録 第一集

蔵書目録 第12巻(鳥取大学附属図書館)

石見国銀山領地方文書目録(島根大学附

属図書館)

出雲国片江浦寺本家文書目録(同右)

藤井高尚の国学解説と目録(増補版)(岡

山大学附属図書館)

岡山市立図書館蔵安井文庫目録

広島行政資料目録 昭和55年版(広島県

立図書館)

広島県内公共図書館郷土資料目録 第

20・21号(同右)

広島市立中央図書館蔵書目録 第五巻

広島市行政資料目録 図書編 追録1

(広島市職員研修所行政資料室)

歴史収蔵資料目録 六(瀬戸内海歴史民

俗資料館)

香川大学増加図書目録 昭和55年版

愛媛県立図書館蔵書目録 第2・3巻

郷土諸家目録 5(同右)

高知県立図書館蔵高知県関係新聞(雑誌

目録

福岡県文化会館郷土資料増加目録 第

2・3集

福岡県文化会館所蔵郷土雑誌目録

福岡県郷土資料総合目録 昭和56年度下

期(同右)

福岡県古文書等緊急調査報告書(久留米

市・三浦郡・大牟田市・三池郡)(同

右)

松崎武俊氏収蔵近世文書目録 第二集

(同右)

九州・沖縄・山口各県関係雑誌記事索引

〔北九州市立中央図書館〕

直方市史資料目録

佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録

一般資料（和書・漢籍）編

（佐賀県）有田町歴史民俗資料館収蔵文

書目録 第一集

熊本県立図書館郷土資料増加目録（昭和53年4月・昭和55年3月）

熊本県郷土資料総合目録 第1分冊（同右）

資料目録（本渡市立歴史民俗資料館）

旧日本河内村庄屋松浦家古文書目録・史料抄（鶴田八洲成）

旧大江組大庄屋松浦家古文書目録・史料抄（同右）

大室家古文書目録 中田村史資料集（同右）

郷土資料目録 昭和53年10月現在（竹田市立図書館）

鹿児島県立図書館奄美分館郷土資料目録 昭和55年3月31日現在

鹿児島県立図書館奄美分館島尾敏雄関係図書目録

仙台市民図書館郷土資料目録 12

沖縄関係文獻目録（沖縄史料編集所）

所蔵目録 雑誌・資料編（建設省図書館建築研究所分館）

建築研究所分館 和書編（建設省建築研究所図書室）

近世史料所在調査報告 18（埼玉県立文

書館）

埼玉県行政文書件名目録 地理編Ⅱ（同右）

旧武蔵国葛飾郡桑川村名主田川家文書目録（江戸川区教育委員会）

静岡県立中央図書館蔵書目録 第1巻

名城大学蔵書目録 第十巻

逐次刊行物リスト一九八二（鳥取大学附属図書館）

（新潟県）川西町史料目録 No.4・6・8・9

文書による郷土的なレファレンス質問に対する回答事例 第一（索引編）（仙台市民図書館）

（宮城県）七ヶ宿町史 生活編

仙台市文化財調査報告書 第35・39集（仙台市教育委員会）

東根市史編集資料 第11・12号

（山形県）西川町史編集資料 第十三号

（福島県）棚倉町史 第一巻

古河市史資料 近世編（町方地方）

木葉下遺跡（茨城県教育財団）

（群馬県）板倉町史 別巻六

（栃木県）上三川町史 通史編 上・下巻

新編埼玉県史 資料編 12

岩槻市史 近世史料編Ⅱ

（埼玉県）寄居町史編さん調査報告 第八集

草加市史調査報告書 第一集

成田市史 近世編史料集一・民俗編

（千葉県）酒々井町史 史料集 一・五

文化財の保護 第14号（東京都教育庁社会教育部文化課）

東京市史稿 市街篇 第七十三・産業篇

第二十六（東京都）

日野市史史料集 近代3

（東京都）羽村町史史料集 第八・九集

（羽村町教育委員会）

品川区史料（一）（品川区教育委員会）

大田区の文化財 第十八集（大田区教育委員会）

大田区の埋蔵文化財 第3集（同右）

埋蔵文化財保護の手びき（同右）

大田区史跡ガイド（同右）

大田区文化財保護例規集（同右）

地図で見る新宿区の移り変わり 牛込編

（新宿区教育委員会）

茅ヶ崎市史 5

平塚市史 2 資料編

平塚市民俗調査報告書 2（同右）

近世平塚を学ぶ人のために（同右）

秦野市史 第二巻

新潟県史 資料編 3・15・17・20・22

新潟県小国町史史料編 補遺（I）

春日山城下町の研究（花ヶ前盛明）

富山県史 通史編Ⅲ

（石川県）能都町史 第三巻

（岐阜県）新修東白川村誌 通史編

東海市史 資料編 第四巻

長岡京市遺跡地図（長岡京市教育委員会）

東大阪市史 近代Ⅰ 史料編

東大阪市史資料 第七集

朝日新聞記事集成 第九集（枚方市史編纂委員会）

大阪府史史料 第六輯

枚方市史資料 第六集

大谷女子大学資料館報告書 第6・7冊

姫路城小論集 第1号（兵庫県史編集室）

龍野市川西地区伝統的建造物群保存対策調査 一九八二（龍野市）

資料調査報告書 第九集（鳥取県立博物館）

（岡山県）川上村史

岡山県史 第二十四巻

広島県史 通史Ⅵ

長門市史 歴史編

（徳島県）勝浦町後史

松山市史料集 第九・十巻

文化財調査報告書 第十輯（九重町教育委員会）

宮崎県史料 第八巻（宮崎県立図書館）

宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ（宮崎県教育委員会）

奄美史料 ⑫（鹿児島県立図書館奄美分館）

FOOT WORK 足の生態学（バルコ出版）

子供遊戯あけくらべ（飛鳥）

当山記載新聞集（往生院六万寺）

岩瀧山往生院六萬寺史 中・下巻 (同右)  
編年百姓一揆史料集成 第九巻 (三一書房)

泉州の豪商食野家の金融活動 (上村雅洋)  
鳥取県の自然と歴史 4 (鳥取県立博物館)

だいどころの歴史 (石川県立郷土資料館)  
ひとつの資料から (岩手県立博物館)

浮世絵に見る日本と西洋 (神奈川県立博物館)

近世の記録 展示目録 (宮内庁書陵部)  
落雁展 (町田郷土資料館)

和時計展 (町田市立博物館)  
仏教工芸の美 (奈良国立博物館)

由良金毘羅さんの船絵馬 (京都府立丹後郷土資料館)

読書活動状況調査 (鹿児島県立図書館電美分館)

経済史文献解題 昭和56年版 (大阪経済大学日本経済史研究所)

宮本馨太郎記念財団収蔵民俗資料及び下の民俗調査報告 (宮本馨太郎記念財団立教大博物館学研究室)

塩づくりとくらし (大日本図書)

日本塩業大系 近世(稿) (日本専売公社)

南山大学人類学研究所叢書 I  
みんなでつくろう—小製作教室 (岩手県立博物館)

仙台市博物館調査研究報告 第2号  
昭和56年度秋田城跡発掘調査概報 (秋田

## 市教育委員会

米沢市史編集資料 第八号  
弘化三年 南町御図帳 (同右)

会津高郷村史 I 歴史編  
天童市史編集資料 第28号

上山市史編集資料 No.34  
(埼玉県) 大井町史料 第十六・二十三集

東京都西多摩郡松原村史  
世田谷区の民家 第1輯 (世田谷区教育委員会)

甕った古民家 第2輯 (同右)  
江戸川区の史跡と名所 (江戸川区郷土資料室)

江戸川区文化叢書 第7集 (同右)  
江戸川区の文化財 (同右)

世田谷区遺跡調査報告 3 (世田谷区教育委員会)

(愛知県) 旭町誌 通史編・資料編1・2  
名古屋叢書 三編 第八・十六巻 (名古屋市教育委員会)

赤穂市史 第五巻  
佐賀県史料集成 古文書編 第二十二巻 (佐賀県立図書館)

三条市史調査史料 近世編 第7・11集  
半世物語 (住友修史室)

妙心寺隣華院展 (サントリ—美術館)  
青森県立図書館郷土双書 第十七・十八集

大船渡市史 第五巻

寒河江市史編集叢書 第25集

(福島県) 大熊町史 第三・四巻  
史料調査報告 第十六・十七集 (足利藩研究会)

岩槻市史 近世史料編 II  
(埼玉県) 滑川村史調査史料 第五・六集

網差役川井家文書 (目黒区教育委員会)  
青梅市の自然 II (青梅市郷土博物館)

敦賀市議会史 第二巻  
(奈良県) 天川村史

(広島県) 海田町史 資料編  
(愛媛県) 別子山村史

島遺跡調査報告 (榎本宗次)  
河北町誌編集資料 第8巻 (同右)

荘内風土記 (同右)  
古事類宛 月報30 (同右)

ひがしね市勢要覧 (同右)  
近世前期領国貨幣とその停廃 (同右)

米沢藩の知行制度 (同右)  
荘内藩確立過程における大庄屋 (同右)

郷土史資料集 IV (同右)  
名物紅乃袖 (同右)

文禄三年露藤村検地帳 (同右)  
山形県に於ける百姓一揆資料 (同右)

郷土研究叢書 第六輯 (同右)  
寒河江市史編集叢書 第十七輯 (同右)

尾花沢市史の研究 (同右)  
山村小山村の歴史 近世編 (同右)

出羽文化史料 (同右)  
山形の歴史 前篇・後篇 (同右)

玉野村史 自和銅元年 至大正十五年 (同右)

太宰府天満宮連歌史 資料と研究 I・II (同右)

(以下次号)

## 彙報

### ○史料の収集

今年度のマイクロ・フィルムによる史料収集は、阿波国板野郡斎田村山西家文書(塩大間屋兼帯船持)について実施した。また、越後国頸城郡若手村佐藤家文書を佐藤友之氏より御寄贈いただいた。以上については、本号「新収史料紹介」を参照されたい。その他、特別研究「近世史料の古文書学的研究」の一環として、岡山県津山市立津山郷土館寄託玉置家文庫(津山町大年寄)、新潟県上越市立高田図書館所蔵柳原家文書(大名)をマイクロ・フィルムにより収集した。

### ○史料の所在調査

今年度の調査は、広島県山県郡豊平町都志見香川慶三氏文書、愛知県豊橋市立美術博物館および愛知大学総合郷土研究所所蔵文書について実施した。詳細については、本号「史料所在調査報告」を参照されたい。

○史料目録の所在調査

当館が進めている近世・近代史料の所在調査の一環として、次の機関所蔵の史料目録を調査した。一、昭和五十七年一月九日～二日、島根県立図書館、島根大学付属図書館、鳥取県立図書館、鳥取大学付属図書館、鳥取県立博物館、担当山田哲好 二、昭和五十八年一月二四日～二七日、岩手県立図書館、青森県立図書館、弘前市立弘前図書館、担当深川美枝子、三、昭和五十八年二月一五日～一八日、三重県立図書館、奈良県立奈良図書館、京都市立歴史資料館、担当林宏保

○国文学研究資料館創設一〇周年記念事業  
国文学研究資料館は、昭和五十七年五月をもって創設一〇周年を迎え、それを記念して、一〇月二九日に式典を挙行し、一〇月二九日～十一月三日には、所蔵資料の記念特別展示を行ない、また『十年の歩み』を編集・刊行した。付属機関の史料館もこの行事に協力し、展示には所蔵文書・錦絵・番付を出品し、『十年の歩み』には、昭和二十六年創設以来の沿革、およびこころ一〇年の事業活動について記した。

○近世史料取扱講習会  
本年度の講習会は、昨年一〇月一八日～二二日の五日間、当館において開催された。なお、昭和五十八年度の講習会は次の通り開催する予定であり、詳細に

ついでには追て連絡する。

一、一〇月三日～同七日、於京都府立総合資料館  
二、一〇月一七日～二二日、於国文学研究資料館

○評議員会議の開催  
昨年九月二四日に、評議員会議史料部会が石井部会長他七名の評議員の出席を得て当館で開催され、史料館の運営について評議が行なわれた。

○運営協議員会議の開催  
昨年八月一日に運営協議員会が発足し、一〇月二八日に当館において一八名の協議員の出席を得て会議が開催され、小山館長を議長に、神保五彌氏を副議長に選出し、運営協議員会議関係規程等および管理運営等の概況(報告)について協議が行なわれた。

○研究会

第六三回(昭57・9・7)

「国立史料館の機能の拡充について(案案)」の検討

第六四回(昭57・11・4)

一紙文書の「表題」表記について

第六五回(昭57・12・2)

複合文書の「表題」表記について

第六六回(昭57・12・21)

真田家文書の分類について

笠谷和比古

第六七回(昭58・3・1)

善徳寺文書の目録作成について

金沢大学文学部教授 高澤 裕一

○定期刊行物の発行予定

1「史料館所蔵史料目録」第三七集(信濃国松代真田家文書その二)を本年三月

に、同第三八集(越後国頸城郡岩手村佐藤家文書その一)を本年九月に刊行予定

2「史料館叢書」五として「徳島藩職制取調書抜」上を本年三月、東大出版会より刊行予定

3「史料館研究紀要」第一五号、「史料館報」第三九号を本年九月に刊行予定。

○人事異動

◇昭和五十八年三月三十一日付

退職(東洋大学文学部へ)

(第一史料室教授) 大野 瑞男

地方史料類公開のお知らせ

当館ではかねてから全国の地方史料類の収集を行なっています。これらについては、所蔵史料と共に公開利用ができるように整備をはかってきましたが、本年四月から一部について公開のはこびとなりました。閲覧の場所・時間・条件などは所蔵史料と同一に扱います。当館は県・郡史(誌)類に限定しますが、市町村史類に

ついても順次公開していく予定です。なお、本誌削号でもお知らせしましたが、史料目録類も昨年一〇月より閲覧に応じておりますので、あわせて御利用下さい。詳細は情報閲覧室(内線五一)へお問い合わせ下さい。

○閲覧業務停止のお知らせ

書庫内燻蒸、蔵書点検の実施にともない、左記の期間の閲覧を停止する予定です。お知らせいたします。

四月二五日(月)～五月四日(水)

史料館報 第三八号

昭和五十八年(一九八三)三月三十一日発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ二六ノ一〇

国文学研究資料館内

国立史料館

電話(七八五)七二二一(代)

印刷所

東京都文京区小石川一ノ二ノ七

勝美印刷株式会社

電話(八二二)五二〇一(代)